

---

# 放課後のフルート吹き

住ノ江

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

放課後のフルート吹き

### 【Nコード】

N6726D

### 【作者名】

住ノ江

### 【あらすじ】

放課後、そつと教室をのぞけば彼の姿。

優美な音色に誘われるように私の足はそこへと向かう。

放課後の校舎には人氣もなく、夕陽だけが廊下でたたずんでいた。ドアの隙間から音が零れ落ちる。そつと中を覗くと、彼の姿があった。

夕陽を浴びてきらきらしている彼。それだけでもう立派な芸術のよう。

彼の手にあるものがきらりと瞬き、音色が途絶えた。

そつとドアを開ける。彼はぱつと振り返った。

「あ、茜<sup>あかね</sup>。まだ帰ってなかったんだ」

彼は白い歯を少し見せて微笑む。

「コンクール……もうすぐだね」

「ああ、うん」

彼は手を休めることなく応じる。

「調子はどう？ 桐斗<sup>きりと</sup>くん」

「うん、まあまあかな」

はにかみながら言う彼。

彼の柔らかそうな髪がふわりと揺れる。

「まあまあ」とか言っているけど、彼が本調子なのはわかってる。だって音がいきいきとしていたから。

フルートを布で丁寧に拭きながら、彼は口を開いた。

「茜には感謝してるんだ。いつも僕のこと支えてくれてさ」

「……うん」

彼は依然下を向いてフルートを拭いている。

「茜がいなかったら、僕はここまで頑張れなかったよ」

「あはは、大袈裟だよ」

「ほんとだって」

「まあでも、桐斗くんに合わせられるのは私くらいしかないかもね」

「……よく言うよ」

私が笑うと、彼はふっと顔を上げた。夕陽が眩しいのか、少し目を細めて。

「ついてきてるだけかと思えば、いつのまにか茜にリードされてたりね」

「だって桐斗くん、ときどき暴走するもん」

「そんなつもりないんだけどさ」

苦笑してまた俯く彼。

伏せられた睫毛が実は長いなんてことは、もうとっくに知っているよ。

「どうだった？」

「……え？ 何が？」

「さっきの演奏」

「ああ……」

もちろん聴いていたけど、正直に言うと演奏よりもその姿が印象的過ぎて。

「よかったよ」

「……その間は何？」

彼はふてくされたようにくちびるを突き出す。

「よかったってば。なんていうか……物悲しい曲調が夕陽に引き立てられるみたいで、すごく幻想的だった。……ボキャブラリー少ないんだから、これで勘弁してよね」

かわいくない、私。

そんな私を気にする様子もなく、彼は窓の外を見る。  
髪はオレンジ色。夕陽が眩く、彼自身を引き立てていく。

「確かに……この時間ってなんだか、センチメンタルになるよね」

そう、私の心の中と同じ。

私の心中を知るはずもない彼は、振り返ると私の顔をうかがうように見た。

「技術面は問題なし？」

「私が言えたことじゃないよ」

少しふてくされながらそう言うと、彼は声をたてて笑った。

「そうだね。まだ茜はときどきミスするから。十六分音符、トチら

ないように!」

先生気取りでびしっと指を突き付けながら言う彼に、苦笑して返す。

ふと外を見れば、夕陽は西の空に沈みつつあった。

「夜が来るね」

来なくていいのに。

彼とこうして過ごす時間が、ずっとずっと続けばいいのに。

「今日は帰ろうか。また今度合わせようよ」

フルートはケースにしまわれ、パチリと鍵が掛けられる。

私と彼を繋ぐ時間が、終わる合図。

「送ってく」

そう言って微笑む彼。

誰にだってやさしいのも知ってる。

だけど今だけは。

そのやさしさが私にだけ向けられる。

私は彼のパートナー。

その期間は、あと一週間しかない。

「ちゃんと家でも練習してよね」

「しますっ」

完全ふてくされモードに入る私をからかう彼。

「冗談だって。茜の腕を見込んで伴奏者を頼んだのは僕なんだから。きみの演奏に文句をつけるわけがないよ」

照れくさくなって、でも表向きは非難がましく彼を睨みつける。

「ほんとだって」

彼の笑顔は、罪だと思う。

ツンとすました顔をしていたのに、つつい頬がゆるんでしま  
う。

夕闇を引き連れて、微笑みあいながらふたりで歩く。  
こんなふうに彼の隣を歩けるのもあとわずか。

縮まるようで、縮まらない彼との距離がもどかしくなる。

だけど。

そのときまでは。

「ねえ」

私が感傷に浸っていると、ふと声を掛けられた。

「今週の日曜、ヒマ？」

「うん。なんで？」

「休日出勤。練習しようよ」

彼の時間を独占したい。

「  
いいよ」

「じゃあまた音楽室で」

手を振って去る彼の背中に思いを馳せて。

「好きだよ」とそっとつぶやいた。



（後書き）

短編だけど、続きます。（長くなりそうだったら短期連載にします）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6726d/>

---

放課後のフルート吹き

2010年10月12日05時16分発行